

特集3 | ホスピタリティに見るデザイン

1

# DESIGNING FOR HOSPITALITY

ホテルのインテリア  
由布院 玉の湯 | Yufuin Tamanoyu



今の時代、ホスピタリティが改めて注目されている。  
それはデザインにどう表されるのか。  
ホスピタリティにこだわった形と感性が訴えかけてくるのは、  
一体、何なのか。  
質の高いデザイン要素が凝縮しているホテルのインテリアを通して、  
それを追いかけていく新企画がスタートしました。

由布院旅館御三家のひとつといわれる「由布院 玉の湯」は、  
3,000坪の雑木林に15棟の離れが点在し、  
自然をわがものにする贅沢な宿。  
1974年から増改築を繰り返し、時代の変化に対応させてきた。  
客室は全18室、和室と洋室の2間を基本とし、  
それにサンルームとプライベートテラスが付いている。  
チェックインからチェックアウトまでの23時間を  
思いのままに堪能できるよう、  
ハードとソフト両面から究極のホスピタリティを追求している。

「由布院 玉の湯」とは、1974年からのご縁である。当時の由布院は“奥別府”という売り出し文句、ひなびた温泉地といった風情だった。やまなみ道路の開通にわいていたが、もちろん高速道路はまだ後のこと。リゾート法もなければ“和モダン”という形容もなかった。ましてや温泉旅館の行く末をどうこう、などと大それたことを考えていたわけではない。伝統的な日本旅館というより、田舎の由布院に立地す

る、自分たちでできる旅館を模索していた。背景には、その後活発になり徐々に実を結ぶ由布院のまちづくりがあった。社会の均質化やグローバル化は、その一方でそこでしか得られないものや地域の個性に魅力を見出すことになる。

そのような時期に決めた計画のルールは今も生きている。河川改修を契機に取りかかった改築だったため、敷地の広さは十分とはいえなかった。そのために戸建て

風離れの客室を雁行配置にして渡りつなぎ、旅館の全貌を見えないようにするとともに、部屋まで歩く過程にいろいろなシーケンスを想定。またその配置によって、それぞれの客室は独立性が高くプライバシーを保てる庭を設けることが可能になった。雑木林に包み込まれるようなプライベートガーデンは外の居間でもある。客室は和室の座敷と洋室の寝室という組み合わせを基本形にした。旅館でありなが

らベッド就寝としたのは、布団の上げ下ろしの負担を軽くする意図もあったと思う。お泊まりの人数に対して余裕を持ちたりネンやアメニティグッズを用意。ゆったりと使っていただく広めの洗面所は、ヒノキの浴槽がある浴室とガラス建具で連続する開放的な水まわり空間としている。建築は木造の在来工法に土壁、外部の床は木レンガや敷き瓦、石積みには由布山の麓、塚原で採れる溶岩を使うなど、自

然素材・地域素材の使用に心がけた。「由布院 玉の湯」は由布院の佇まいの中、通りに面して門などの構えや塀もなく、そこにいるお客さまが自然に受け入れることができる空間、できるだけ自然に振る舞える緊張しない空間づくりを目指している。客室では和室の畳を始めベッドルームのライティングデスク、広めの縁側に置かれたソファや庭に置かれたガーデンチェアなど、さまざまな居場所を用意。暖炉と蔵

書を置いたロビーや露天風呂のある大浴場は宿泊のお客さまのための居場所。雑木林の中の「ティールーム ニコル」やレストランの「葡萄屋」は通りを歩く人々にも開かれている。「由布院 玉の湯」のもてなしは、もてなす側とそれを受ける側のギャップが大きいこと、言い換えれば日常と非日常の間にあるといえそうだ。

## DESIGNING FOR HOSPITALITY

アーキテクト・コメント | 建築・インテリア 鮎川 透 | Toru Ayukawa



- 1—自然と一体になった「ティールーム ニコル」。林の中の木霊(こだま)が室内まで流れ込んでくるようである
- 2—大きな花鉢が置かれた誘いの玄関。四季折々の花が客を温かく迎える、さりげない構えが特徴
- 3—メインダイニングのアプローチ。林の緑と石畳の黒色が程良いコントラストを醸し出している
- 4—エントランスロビーの飾り棚。地元作家の作品越しに、ラウンジ、その向こうの林が透けて見える。開放感があり親近感もわく不思議な空間
- 5—フロント脇のラウンジ。テーブルはスギの輪切り。良いものをじっくり使い込んでいる



- 6—家具から室内の要素すべてを木質でまとめた談話室。テーブルはセンノキの一枚板。由布院を拠点に活躍するクラフト作家・時松辰夫氏の制作
- 7—路地の角に置かれた石臼を転用した花鉢。背景を透かして見せる手法は、優雅であり歴史をも感じさせる
- 8—林に溶け込むように設けられた外風呂。内部から外部の露天風呂までが連続する一体の空間として表現されている。ここでも自然素材が活かされている
- 9—カワラマン・山田脩二氏の敷き瓦。排水溝も見事な芸術作品に…
- 10—バーのカウンターと椅子。10cm厚の一枚板が安心感とつろぎの雰囲気を出している | 11—竹工芸家・野々下一幸氏の竹細工による照明。温かみのある和やかな空間を演出している

大きな看板があるわけではない。森の中の小さなカフェに誘われるように林に足を踏み入れると、そこが玉の湯だった。「旅館やホテルは、地域のいろんな文化を表現できる場ですが、とかく同じようになりがちでしょ？でも、建物、お料理、皆さんをお迎えるスタイル…、これは一律じゃなくていいと思うんです、由布院というこの風土に合っていれば」とこやかに話す桑野和泉社長はあくまで自然体だ。

「由布院 玉の湯」は、1953年、禅寺の保養所として開業した。禅寺ゆえに来る人を拒まず、誰もが入ってきやすい“環境と宿”を目指した。「押し付けるのではなく、お客さまが自然に馴染める空間、それは緑との関係性だと思います。日本人はそのDNAを持っていますでしょう？」先代は“静けさと空間と緑”の温泉保養型に着目し、突然、まちの真ん中に森をつくり始め、周囲を仰天させた。温泉が湧き出すくらいだ

から植物には不向き。まずは土壌の入れ替えから始まったという。約35年を経た今では、木々は根を張り、森が呼吸をしている。足元には可憐な草花が咲き、手の届きそうなところに蝶が羽ばたき小鳥の音が響きわたる。陽光と風雨に育まれた生命そのものだ。「この雑木林が時間の流れに寄り添いながら“玉の湯らしさ”をつくってきました。でも、どこにでもある風景でしょ？ そう、特長のないのが特長かもし

れません。“ここだけは別世界”には断じてしたくなかった」と語る。みんなと一緒に生きている感じ、暮らしが日常とつながっている感じこそが大事なのだと言う。「知人の別荘に泊まる時の安心感と期待感、加えて由布院という温泉地で過ごすことで非日常性を感じていただきたい」に納得だ。のんびりと時間を忘れ、とめどない幸せを感じる感覚は絶品に違いない。「私どものおもてなしは、チェックインからチ

ェックアウトまでの23時間を柔らかく緩やかに過ごしていただくためのお手伝いをすること。温泉に入って何度もベッドに横になって、マイガーデンで読書。ゆっくりお食事をした後は、バーとかロビーで夕涼み。たとえ一人でも安心してのんびりしていただきたい」。ただし、おもてなしの7-8割は、お客さまが来られる前の仕事になるそうだ。「お客さまを迎える日々の気持がおもてなしと自分に言い聞かせていますから

…」と桑野社長は笑う。お客さまがリピーターになって「いつもの宿に帰ってきた」と思わせる秘訣はここにある。何という心意気だろう。

#### 【建築概要】

名称:由布院 玉の湯  
所在地:大分県由布市湯布院町湯の坪  
敷地面積:7,915m<sup>2</sup> | 建築面積:2,567m<sup>2</sup>  
延床面積:2,929m<sup>2</sup> | 客室数:18室 | 創業:1953年  
ホームページ:http://www.tamanoyu.co.jp/  
設計:環・設計工房

## DESIGNING FOR HOSPITALITY

インタビュー | ちょっと豊かな空間で… 桑野和泉 | Izumi Kuwano

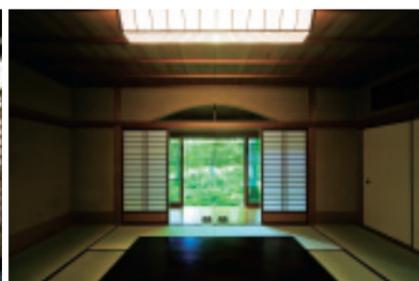
12



13



14



15



12—客室のサンルーム。室内からテラス、そして林へとつながる空間は自然に抱かれているような、安らぎと癒しをもたらしてくれる。完全なプライベートガーデンが付いている  
13—路地伝いに雁行して客室が配置され、離れのような雰囲気を出している。木製の格子戸を開けて玄関に入る  
14,15—客室は、和室(居間)と洋室(寝室)の2間の組み合わせが基本。それぞれの趣を享受することができるように、あえて一体空間にしないで、独立した構成にしている。洋室からはサンルーム、そしてテラスへとつながっていく

16



17



18



19



20



21



16—洗面室から浴室につながる水まわり空間。外部に開かれた明るい浴室は露天風呂のように開放感がある  
17—ベッドサイドに置かれたスタンド。工芸家・池田和子氏のデザインで、ランプシェードの和紙に押し花が描き込まれている  
18—ビクチャーウィンドウに向かって設けられた寝室のライティングデスク  
19—洗面室の窓に取り付けられた布製のスクリーン  
20—洗面カウンターの天板。久留米紺の布の上にガラスが嵌め込まれている | 21—和室の広縁から林の中に迫り出したテラスのガーデンチェアとテーブル